



No.59

2005年3月発行

新潟県支部報

マイ スコープ

早春 ヤツガシラ飛来



発見日：2005年3月22日
発見者：上越市 大原淳一
場所：上越市本長者原
撮影者：上越市 金子俊彦



<編集部 記>

ヤツガシラ飛来の情報をキャッチして、問い合わせたところ、早速皆さんから快く情報と写真を提供して頂きました。厚く御礼申し上げます。

ヤツガシラは春に旅鳥として、少数我国を通過します。県内各地でも観察例はありますが、まれな鳥です。昨年も人家の庭に飛来し、一般の人が標準カメラで撮影した、雪の中での貴重な写真も提供して頂きました。



撮影日：2004年2月9日 柏崎市松波
撮影者：柏崎市 霜田文子

水鳥は水田をどう使っているか

— 渡り鳥からみて潟と水田は餌場として欠かせないもの —

新潟市 千葉 晃

はじめに

日本屈指の稲作地帯である新潟平野にはよく整備された水田が広がり、そこには今では貴重になった潟沼が点在している。これら水田と潟沼は信濃川・阿賀野川二大長流の恵みとして我々の生活を支え活用され、また多くの野生生物にとってはかけがえのない生息空間として利用されてきた。振り返ってみれば、水田での稲作は増産・拡大路線の大きな流れから効率化・省力化に転じ、近年は都市化による耕作地の縮小・消失化と生産調整に伴う転用・中断化が進行している。野生生物もその変化に曝され、中には絶滅または絶滅に瀕しているものも少なくない。一方、潟とその周囲への変化は水田ほど顕著ではなく、幸い、湿地の存在価値と重要性への理解は佐潟のラムサール条約登録湿地指定を契機に広がり、保全と賢明な利用について意見交換する機会も増している。ここでは、水鳥と湿地（潟と水田）の関係を採食習性という観点から眺めてみた。

この小文は、第3回にいがた湖沼フォーラム（平成17年2月27日、新潟市万代市民会館）の席上口頭発表された要旨に若干の修正を加えたものである。

水鳥生息地としての潟と水田の比較

水鳥と一言でまとめられる野生鳥類には様々な分類群が含まれており、ここでは、川や湖沼などいわゆる内水面とその移行帯に生活基盤をおくものと理解し、紹介する。すなわち、これらはカイツブリ類、ペリカン類（ウの仲間）、コウノトリ類（サギの仲間）、カモ類（ガン・カモ・ハクチョウの仲間）、ツル類（ツルとクイナの仲間）、チドリ類（シギ・チドリ・カモメの仲間）であり、各グループ間では生活様式や生活形が明確に異なり、また水環境

への依存・適応程度も異なっている。グループ内では共通点が多いものの、種間で体サイズ、餌とする生物、採食方法や活動時間帯も様々である。したがって、水鳥の種類数と個体数を指標として水域環境の多様性および収容能力を評価することが可能である。農耕地（水田地帯）と潟沼を比較すれば、水鳥の種類数と個体数はいうまでもなく後者が勝り、水田より潟が棲みやすい良好な環境であることは一目瞭然である（新潟史編自然会編、1991）。ただし、水田が川や潟沼と不可分の一過性水域を形成している点や水鳥の生息地が自然環境要素以外に狩猟圧など人為的要素とも関わる点は忘れてならない重要な内容であろう。

水鳥の大半は渡り鳥で、地球規模の季節的移動を行っている。このため、個体維持に多くのエネルギーを必要とし、越冬地や通過地となる潟・水田では、安全性以外に餌生物の種類と量が大きな要因となる。この観点から潟と水田を比べた場合、一般論として言えば、安全性では水田より潟が、また、餌生物の質ないし多様性でも水田より潟が概ね良好であると言えよう。しかし、餌の絶対量に関わる面積では水田が圧倒的に勝っている。水田は人為環境そのものであり、起耕、湛水、植え付け、排水、収穫と作業が加わり、その都度、乾田・湿地・草地と様相が変化するのが特徴である。この変化に合わせるように様々な水鳥が採餌に訪れるが、どんな鳥が、いつ、どのような状況下で水田を利用するのか、また、どの程度水田に依存しているか等を調べる事は野生生物の環境保全や湿地の創生・活用を考える上でも味深いテーマである。つぎに、ハクチョウ・ガン類、ユリカモメ、サギ類、シギ・チドリ類を具体例として、採食地としての水田利用について個別に紹介する。

水田をめぐる各種水鳥類の採食生態

ハクチョウ・ガン類: コハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガンはカモ類を代表する大型水禽（ハクチョウの体重は10kg、ヒシクイは5kg）で、共に水鳥として10月頃新潟平野に飛来し、一部はさらに日本海に沿って南下する。潟（ねぐら兼採食地）と周辺の水田（採食地）を主たる生活空間として越冬し、翌春3月初旬再び繁殖地を目指して北上する（日鳥標識にいがたグループ、2004）。これら4種とも比較的規則正しい日周活動を示し、日の出前後に家族やその複合群として潟を離れ、周辺の水田（約30km以内）に広く分散して活発な採食（時には休息・休眠を伴う）を行い、再び潟へ戻る行動を繰り返している（千葉他、1993）。採食地から戻る時間帯は種によって異なり、おそらく様々な因子（季節、天候、採食地の安全度、餌量分布と採食量など）が関与しているとみられる。ハクチョウはガンよりやや遅く潟を離れ、遅く帰還する傾向があり、近年はねぐらとなる潟や河川中州に戻らず水田で夜を過ごすものもみられるようになった。これは、水田での安全性が増したためと推察される。オオハクチョウはコハクチョウよりも潟を好み、潟内の水生植物（マコモの地下茎など）への依存度が高い様子が窺え

る。一方、コハクチョウはもっぱら水田で収穫後の落ち粕を採食している。ヒシクイ（亜種オオヒシクイ）は潟内では、マコモや他の水鳥が利用できないヒシ果実を、また水田ではハクチョウ類が利用できないイネ再生稈基部を刈り取るように採食している（千葉他、1993; 渡辺他、2003）。この相違は両者のクチバシや舌の構造の差異によく反映されている。

ユリカモメ: カムチャツカなどで繁殖を終えた本種は9月頃日本に飛来し、種に西南日本の沿岸水域で越冬し、5月初旬一斉に北へ移動する（千葉他、1991）。新潟県では沿岸域や河川を主な生息空間とし、主な餌は魚類とみられるが、水面や水面直下を流下する小形生物やゴミを採る様子が観察できる。夜間は沖合い海上にねぐらを取り、早朝信濃川などの河川を中流域まで遡り、採食後再び河川を下り海に戻る生活を繰り返している（長岡野鳥会編、1988）。しかし、水田で耕作と湛水が始4月～5月には、河川沿いに「浅い潟」と化した水田に多数飛来し、耕作機械の後を追うように採食を繰り返す（図1）。この営みは、起耕で地中から追い出された小形無脊椎動物（昆虫やミミズなど）や湛水によって水田に導かれた小魚（フナ、ドジョウ、イトヨなど）をねらった、いわばヒトの作業を利用した頭脳的な採食と考えられる。

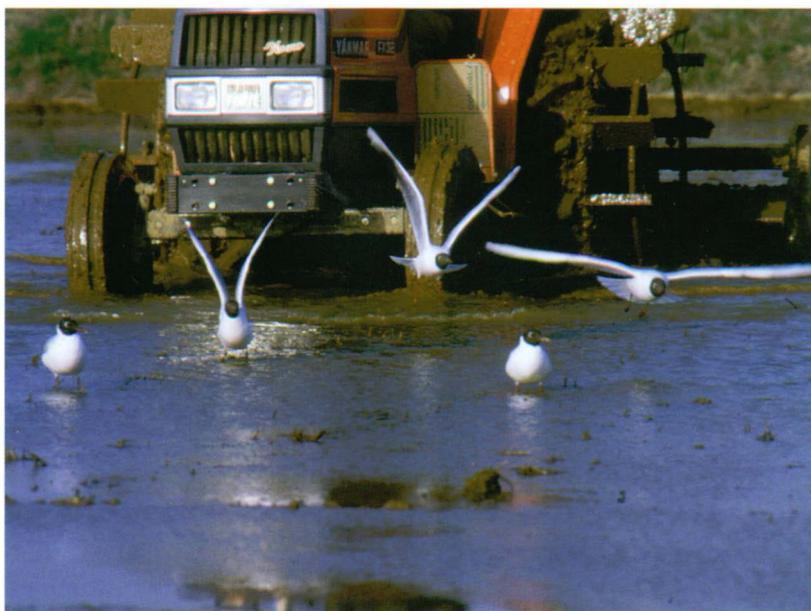


図1. 代掻きの水田に飛来したユリカモメ

サギ類: 新潟県内には27ヶ所もサギ類の集団繁殖地（コロニー）があり、山麓、河川、海岸などあちこちの樹林に単独型あるいは混合型のコロニーが営まれている。（渡辺、2002）。中でも、阿賀野川下流中州にはアオサギ、ゴイサギ、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギの6種類のサギが集まり、安定で（20年以上も継続利用）かつ大規模な（北陸地方随一屈指の大きさで、巢の数2000個

以上) 混合型コロニーを形成している(図2)。サギ類の多くは魚類を中心に、水生無脊椎動物(甲殻類)、両生類、昆虫類を餌としており、どの種も水田を広く採食地に利用している。つまり、安定した大規模コロニーの形成は新潟平野の豊かな餌資源の反映でもある。ところで、コサギの採食を小河川とハス田で比べると、小河川ではアメリカザリガニ、ドジョウおよび高遊泳性魚類を、一方、ハス田ではドジョウを主に捕食しており、餌生物の移動性に合わせて異なる発見方法(待ち伏せ法と歩行法)と捕食方法(追跡型と非追跡型)を用い、ハス田では非追跡型捕食が行われることがわかった(山田, 1994)。一方、アマサギは収穫前期から収穫期の稲田・畔に集団で飛来し、他のサギ類と異なり、もっぱら昆虫(バッタ類)を主食している様子が観察できる。本種は1970年頃から増加し、国内で急速に分布域を広げているが、それがどのような理由によるかはまだ解明されていない。

シギ・チドリ類: 潮の干満差が極めて少なく潮干狩りの行われない日本海沿岸では、太平洋沿岸にみられるような顕著なシギ・チドリ

の渡来地は殆ど存在しない。しかし、海浜やその近くに水を湛えた餌生物の豊富な湿地環境が形成されれば話しはちょっと別である。新潟市とその近郊では、かつて例外的にシギ・チドリが種類数・個体数共多く、比較的長い間滞在したことがあった。1969年関屋分水路掘削の際生じた水溜まり、1980年の多雨冷夏と関連して巻町越前浜に生じた水溜まりがその例である。共通点は水溜まりの形成時期が旅鳥であるシギ・チドリの移動時期と重なったこと、淡水性の浅い水溜まりで生活排水が少し入り込み、ユスリカ、ハエ、アブなど餌生物が大発生したことなどである(図3)。規模が小さく事情が少し異なるものの湛水された休耕田は同様なシギ・チドリの一過性渡来地になることが最近岩船地方の水田でも観察されている(三母, 2004)。また、春のハス田もシギ・チドリ類の集まる場所としてよく知られている(北沢・渡辺, 1992)。これらの事例は、今後潟やその隣接地の水田に「シギ・チドリ渡来地」を創生し、減少著しいこれらを保護する上で何かよいヒントになるように思われる。



図2. 阿賀野川下流の中州にみられるサギ類の集団繁殖地



図3. 越前浜の水溜まりと大発生した昆虫類（シギの餌）

引用文献

千葉 晃・高辻 洋・山本 明・本間隆平(1993)
新潟県に飛来するヒシクイとその越冬生活.
第6次鳥獣保護事業計画鳥獣保護対策調査報告書. 新潟県.

千葉 晃・渡辺 央・宮越一俊・石井哲夫(1991)
新潟県沿岸におけるカモメ類の個体数にみられる季節的变化. 長岡市立科学博物館研究報告, (26) 73-81.

北沢秀樹・渡辺朝一(1992)新潟県大口ハス田におけるシギ・チドリ類の飛来状況.
日本鳥類標識協会誌 7: 40-46

三母伸一(2004)神林村の休耕田にきたシギ・チドリ類. 野鳥新潟(125): 7.

長岡野鳥の会編(1988)信濃川の野鳥. 長岡野鳥の会.

新潟史編さん自然部会編(1991)新潟市史資料編12自然. 新潟市.

日本鳥類標識協会にいがたグループ(2004)コハクチョウの採餌生態調査(平成15年度). 新潟市委託未公表資料.

渡辺朝一・村上 悟・山崎 歩・片岡優子(2003)
オオヒシクイによるヒシ属果実の採食. Strix 21: 195-206.

渡辺 央(2002)県内におけるサギ類集団繁殖地の分布と形態(サギ類集団繁殖地調査報告). 野鳥新潟(121): 2-3.

山田 清(1994)餌および採食環境に応じたコサギ(*Egretta garzetta*)の採餌行動と採餌なわばり. 日本鳥学会誌42: 61-75.

<編集部付記>

第3回にいがた湖沼フォーラム「潟と文化を語る」は、同実行委員会(構成団体8NGO)が平成17年2月27日、新潟市万代市民会館で開催したもので、本支部からも本間由紀子さん、尾身秀雄さん等が事務局として参加・貢献しました。

日本野鳥の会佐渡支部創立50周年記念式典に出席して

日本野鳥の会新潟県支部長 大島 基

平成16年12月4日(土)トキ交流会館においてオープニング「佐渡折々の鳥」の 슬라이ドが映写される中、副支部長土屋さんにより開会が宣言され、支部長坂田さんは、式辞の中で、会員6人で創立した全国12番目の支部として歴史のある佐渡支部を強調しておられました。

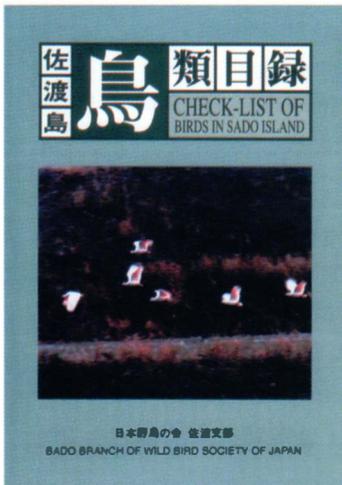
祝辞として環境省自然保護局北関東地区自然保護事務所新潟支所長會澤明さんと私が、ご挨拶させていただきました。トキの研究者として有名な元佐渡支部長の佐藤春雄さんより「佐渡支部創立の頃」と題し、数々のエピソードをお話いただきました。

記念講演では、講師として野鳥写真家第一人者叶内拓哉

さんをお招きし、「鳥にまつわる楽しい話」と題したスライド映写によるご講演をいただき、本当に楽しく聞かせていただきました。

閉会の辞は

副支部長長尾さんでした。式典終了後「志い屋ホテル」に場所を移し、楽しく懇親会が催されました。翌日5日には、加茂湖と久知川ダムで記念探鳥会を行いました。あいにく雨風の大荒れ天気でしたが、久知川ダムでは100羽を超すオシドリの他、オジロワシ成鳥1羽が雄姿を見せ、驚いたオシドリが一斉に飛び立ち圧巻でした。終了後、大荒れが続く中、副支部長土屋さんが叶内さんと私を両津港まで送ってくれたのですが、欠航になりました。おかげで土屋さん宅に泊めていただき、ご馳走になり一晩中、野鳥談義に花を咲かせ楽しい夜を過ごさせていただきました。この場をお借りして、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



＜編集部より付記＞

記念式典に合わせて記念出版物のお披露目もおこなわれました。佐渡鳥類目録(A4版140頁、付図)は、これまで佐渡で記録された333種の野鳥が、リストと共に簡潔な解説文(日本語と英語の併記)で紹介されており、珍鳥・希鳥を含む鳥の鳥達が8頁分のカラーで掲載されているのも圧巻です。なお、本書についての問合せは日本野鳥の会佐渡支部へ直接御願います。

「新潟県自然・環境保全連絡協議会」発足と参加の経緯について

保護部

はじめに

前年度の保護活動方針に基づいて、山本部長と渡辺・尾身両保護部員が3月28日、新潟市鳥屋野地区公民館で開催された「新潟県自然・環境保全連絡協議会」設立準備フォーラムに、参加した。これを受けて、新潟県自然・環境保全連絡協議会（以下「県環境連」という）の設立と加入を今年度支部保護部の重点活動と位置づけ、支部役員会の了解と総会の賛同を得た。そして、今年度は設立に向けての設立準備委員会から参加することにした。以下、順を追って会議の様子を報告する。

1. 「県環境連」設立準備フォーラム

協賛団体84、県内各地からの参加者123名を得て、次の次第で行われた。

①トーク「新潟らしい自然のありかた」
アウトドアライター 遠藤ケイ氏

②団体活動発表（つぎの11団体）
環境共育ネットワーク・ワンダースクエア、エコトピア上越、新潟県有機稲作ネットワーク、十日町EM研究会、巻機山を守るボランティアの会、ふるさとの清津川を守る会、関屋の松林を守る会、佐潟環境ネットワーク、なじらね沼垂、堀割再生物語プロジェクト実行委員会、ESD地域ネットワーク。



③パネルディスカッション「新潟の自然と環境を次代に引き継ぐために」

＜パネリスト＞

遠藤ケイ氏（前掲）、吉田正人氏（日本自然保護協会常務理事）、井上信夫氏（ゆきぐに自然学校代表）、永澤由紀子氏（環境カウンセラー・デボジット代表）

＜コーディネーター＞

市嶋 彰氏（環境共育ネットワーク・ワンダースクエア代表）

④分散会（つながる意味を考える）

⑤まとめ「県環境連」の設立に向けて

以上、設立準備フォーラムには盛りだくさんの内容があり、これをすべて紹介することは紙幅の制約上不可能である。そこで、事務局がまとめた資料集を引用し、大会参加者のアンケートに答えられたご意見の一部を紹介したい。

①遠藤氏のトーク（下田村の厳しい自然環境の中で一人でストイックに生活して、その体験から生まれた高い精神性に感銘した。一つの生き方としては興味があったが、社会との関わりをもっと聞きたかった。）

②団体活動発表（街づくりから自然環境まで幅広い団体が集まって、それぞれ熱心に活躍している。各団体が頑張っている。是非ともネットワークづくりが必要なのではないか。）

③パネルディスカッション（バランスのとれたよい人選であった。各パネリストの貴重な体験やご意見が参考になった。永澤さんのごみゼロ発言、実践をふまえてよかった。是非やり遂げてほしい。）

2. 設立総会に向けて

「設立準備フォーラム」で出された意見を要約すると「自然と環境の問題は私たちが共有しなければならない重要な問題であり、この問

題解決のためには全県的な幅広いネットワークを形成する必要がある」というものであった。これを受けて、6回にわたり設立準備委員会で会議を重ねて、次のような合意が得られた。

①会の理念と目的：人間の活動は必ず自然環境と結びついており、また、人間の活動は自然の一員だということを再認識する。20世紀までに破壊してきた自然環境を再生して次代に引き渡す責任がある。広くゆるやかに連携・協力して、自然と環境に関する諸問題を主体的に取り組んでいく。

②ゆるやかな組織を早急に立ち上げる。

③十分な話し合いによる合意形成と知恵・創意あふれる民主的な運営に心掛ける。

3. 設立総会・記念講演・シンポジウム

9月20日、新潟ユニゾンプラザ「大研修室」で約160名の参加者を得て、次の次第で行われた。

第1部 総会・経過報告・会則審議

第2部 団体活動発表・記念講演・シンポジウム

①団体活動発表（6団体）

「セナミスミレ」を育む、佐潟周辺の砂丘と環境～砂丘は宝物・保全を考えよう、関屋の松林を守る運動の現状、国道289号線付近の自然について、住まいと環境問題～外材・新材材の家ではなく、地元材の家づくりを、ねっとわーく福島潟の活動と課題

②記念講演「石川県の自然と仲間たち」

講師 加藤正現氏（NPO白山の自然を考える会理事・事務局長）

③シンポジウム「自然と環境を守り再生するために、何を？」

＜パネリスト＞

五十嵐実氏（日本自然環境専門学校長）

大熊 孝氏（新潟大学工学部教授）

島田伸子氏（環境カウンセラー）

江村隆三氏（新潟経済同友会・『財』新潟経済社会リサーチセンター常任理事）

諸橋 潔氏（新潟県自然観察指導員の会会長・県環境連会長）

＜コーディネーター＞

高見 優氏（イヌワシ・ネットワーク）

以上、設立総会当日の様子は「新潟県自然・環境保全連絡協議会会報1号」に詳しく紹介されているのでそれをご覧いただきたい。ここでは、今後の「県環境連」の運営に参考となると思われること3点について引用しておきたい。

①団体の利害を離れ、個人の資格で自由に足元から（シンポジウム江村隆三氏）・個人会員中心の活動（記念講演加藤正現氏）・この種のネットワークは個人を前に出してやったほうがよい（東工大教授桑子敏雄氏）

②会の活動・存在感に重みを（江村氏）・存在するだけでいい、それが力になるんだ（白山の自然を考える会初代会長直木賞作家高橋治氏）

③行政も参加できるような協議会を（シンポジウム大熊孝氏）



おわりに

日本野鳥の会は自然保護団体としては日本最大のもので、自他共に認める組織である。かつて、全国集会で「野鳥のために自然環境は守らなければならない」と野太く話されていた初代会長中西悟堂氏の叫びが何時までも忘れられない。設立総会には大島支部長と共に保護部員4人全員出席して、自然環境保護について、改めて思いを深くした。

（尾身秀雄）

弥次馬探鳥記

新潟市 伊藤 定市

コウノトリ

先日の新聞・テレビで、コウノトリが西蒲原地域で怪我をし愛鳥センターに収容されたことが報じられました。

このコウノトリについては私も少し関わりを持ちましたので報告いたします。

コウノトリは1986（昭和61）年に飛来した時にも数か月にわたって観察し、その時の写真を私のアマチュア無線の交信カードにも使用していて、とても気に入っている野鳥の一つになっています。

去年、2004（平成16年）11月28日9時半頃かねて懇意にいただいている吉田町の鳥獣保護員；常田輝知さんから電話をいただきました。「いま、コウノトリが来ています。場所は佐善のたんぼ。近くの住人から、ツルがきていると聞き、行ってみたらコウノトリだったのです。写真も撮りましたので、よろしかったら送ります。今は分水方面へ飛び去りました。愛鳥センターに電話しておきました。」との内容でした。

その日は、10時過ぎまで用があったので、用を済ませてから車で西蒲原の広域農道9号線を南下し、弥彦村から分水町に至る9号線周辺を探しましたが見つからず、夕刻になって帰宅しました。

翌日29日は雨模様でしたが、再度車を走らせました。途中、電話で常田さんに連絡をとり、詳しく場所の情報を聞きながら探しました。広い耕地の何箇所かにカモ猟のための無双網が仕掛けられていましたが、昼間のことで番人もいませんでした。あちこちと探し回



り、また空振りかど力を落としかけたとき、遠くに止まっている車が目にはいりました。

ピーンとききました。「これに違いない。」早速、車を静かに近寄せて見ると、車の主は車中から巨大なカメラを構えていて、その先にコウノトリがゆったりと採餌していました。

鳥は水田の間に作られた用排水溝に沿って歩き回り、時々溝に出入りしながら小動物などを捕食していました。水の無い田でも何か捕食しているところを見ると、水中生物ばかりでもなさそうです。

私も車の窓を開け、500mmのレフを向けました。車の中から数枚、車の外へ出て数枚。私の車の後ろにも車が来て、「愛鳥センターから来ました。」とのこと。

冷たい雨が止みそうにもないので、その日は引き上げ、翌30日にまた行きました。この日は曇り空ながら時には陽も射し、虹が出たりしていました。

コウノトリは昨日と同じ場所にいました。広域農道9号線から100mほどしか離れていないにも拘らず、行き交う車に驚く様子も無く、ゆったりとマイペースで餌を探して歩き、時々立ち止まって周囲を見回しています。今日の観察者は私一人、こちらもマイペースでゆっくりとカメラのシャッターを切り、光線の加減を考慮して車を移動させて観察・撮影を続けました。

時には片方ずつ翼を広げて伸びをしたり、低く飛んで50mくらい移動したり、サービスも怠らぬ様子。近くでアオサギが飛びましたが、コウノトリよりも小さく見えます。図鑑で見たら翼開長が40cmも違うのです。そのうち、サービスに飽きたのか、見えにくい溝の中へ入っていきまされたので、観察をきりあげて帰路につきました。

12月5日に鳥屋野潟で行われた探鳥会の後の情報交換で参会者にお伝えしました。翌日私

が行って見たときは発見できませんでしたので、もうどこかへ移動したのかと思っていましたが、その翌7日に常田さんからの電話で、怪我をしていたのを県の職員と共に保護捕獲し、獣医の手当てを受け愛鳥センターに送られたという連絡をいただきました。後で聞いたのですが、12月5日に鳥屋野潟から直行した人の話では元気な姿を確認できたとのことでした。

その後の情報で、怪我の手当ての甲斐もなく傷が悪化し、再び飛べるようになるのは望めないとのことで、ずっと施設で保護飼育されることになったとのこと。私も大変残念に思い、写真を見ながら元気だったときの姿を楽しんでいます。

ハクガン

暮れも押し迫った12月23日、大潟の朝日池に9羽のハクガンが来たということが、画面一杯の飛翔写真とともに新聞紙上で報じられていました。新潟県で9羽のハクガンというのは記録に新しいことです。

その日、親戚への訪問を予定していましたが、先方の都合で取り消しになり、体が空いてしまいました。それで、佐潟へでも行こうかと車を出したのですが、ハクガンのことが頭から離れず、運転中に方針を変更して、国道402号線からシーサイド線に入り、そのまま海岸線を柏崎まで走らせました。

鯨波まで国道8号線に出、柿崎で左折すれば間もなく朝日池です。途中のコンビニで昼食を買って、朝日池の畔で車中で食べながらの探鳥開始です。

時刻は既に12時。池には若干のカモ類と少数のヒシクイがいましたが、ハクガンの姿は見えません。しかも、ヒシクイは私の到着を



待っていたように次々と飛び立って農耕地の方へ行ってしまいました。

私の他にも1~2台の車がおりましたが、皆ヒシクイの飛んだ方向へ行ってしまいました。取り残された私も落ち着きません。食事を終わって、先の車が行った方に行くことにしました。

水のない水田にはカラスが群れています。ミヤマガラスかコクマルガラスでもないかと注意しましたが、ハシブトガラスがほとんどでした。

400~500m遠くに1台の車が止まっています。双眼鏡で見るとその周囲の田の面が揺れていて、その中に白い点が幾つか見えました。「これだ!」と確信して静かに近付きました。止まっていた車が移動して去り、後は私一人。順光位置の農道端に車を止め、観察開始です。数百羽のヒシクイの向こう側に一団の白い鳥が餌をあさっています。望遠鏡で車中から観察したら、間違いなくハクガンでした。翼端の黒いところも薄紅色の嘴も確認できました。中にまだ灰黒色が残っている若鳥が1羽います。首を上げているものや屈んで餌を採っているものがいますが、9羽すべてが首を上げてくれません。期待して待ち、何枚も写真を撮りましたが、1時間半の間、ついに揃うことはありませんでした。移動して角度を変えてみましたが同じことで、そのうちに雪が激しく降ってきましたので、引き上げてきました。帰りの車中も帰宅後も満ち足りた気分で幸せ一杯です。

2004(平成16)年は天災地変が相次ぎ、大変な年でしたが、年末になって何かしら好転するような予感がして、新しい年に期待を持ったことでした。



朝日池 (ガン・カモ) 探鳥会

2004年11月23日



超ラッキー!! オオヒシクイの群の中にいた
珍鳥カリガネ (中央) を心ゆくまで観察



探鳥地の朝日池と米山遠望



好天に恵まれ、大勢の参加者で盛況でした。



最後の鳥あわせ風景

寺泊 (海鳥) 探鳥会

2005年2月6日



冬にしては好天でしたが、風はやはり冷たい。屋食時、恒例の支部特製タラ汁を食べました。うまい!!



野鳥の会会長 新潟で公演

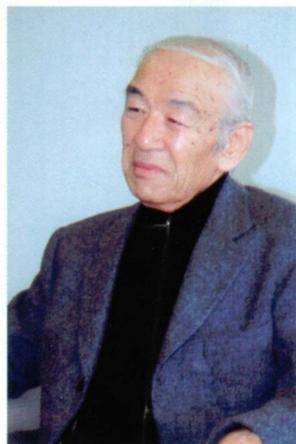
2005年2月12日、例年になく厳しい冬を迎えていた新潟に、日本野鳥の会会長である柳生博さんが、新潟県主催の「ストップ温暖化！フェスタinにいがた2005」で基調講演を行うため来県された。フェスタは新潟市内にある新潟ユニゾンプラザで開催され、新潟県内自然保護関係NGO団体もスタッフやボランティアとして多数参加した。柳生会長は、基調講演の中で「新潟は海拔ゼロメートル地帯が広がる湿地平野、地球温暖化で海水面が上昇した場合大きな被害を受ける地域なので、新潟が地球温暖化にストップをかける発信基地になってほしい。」と言われた。また講演の中で、新潟市を飛砂から守りまた渡り鳥達の大切な休息場所となっている関屋の松林が道路建設に伴う伐採の危機にさらされていることについても言及され、とても心配しておられた。

フェスタ終了後、大島支部長と県支部幹事が鳥屋野潟を望む展望台にご案内し、水出での採食を終えて夕焼けの中に戻ってくるコハ



クチョウを観察された。その後県支部役員による柳生会長を囲む会を(日本野鳥の会協定旅館「湖畔」で)開催した。終始にこやかな会長はテレビで拝見する以上に気さくで素晴らしく、限られた時間の中、とても有意義に親睦を深めることができた。また関屋の松林保護の問題や新潟平野湖沼群のラムサール条約登録の可能性について地図や写真で説明申し上げ、柳生会長は常に我々の話を真摯にお聞きくださった。楽しい時間はあっという間に過ぎ、再会を約束して帰京された。

(文責 岡田、写真 小野島)



発行 2005年3月30日 No.59

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 (振替口座) 00610-1-6002